

1. 開催日時：2024年9月26日（木）13時30分～15時30分

2. 開催場所：おかやま西川原プラザ 別館 第6会議室

3. 出席者：自治体13名、事業所・その他15名、オンライン参加1名、

講師：4名、事務局8名 計 41名

4. 講演内容

【第1部】事例研究

- ・「デコ活」～くらしの中のエコろがけ～

脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る国民運動

環境省 地球環境局脱炭素ライフスタイル推進室／金井 大樹

- ・サステナブルファッションの推進

一般社団法人 unisteps／鎌田 安里紗

【第2部】研究会参加者の取組みと事業創出について

- ・瀬戸内市での取組紹介

瀬戸内市 環境部生活環境課／坪本 美希

- ・脱炭素化に資する事業創出の進め方について

事務局

（敬称略）

5. 配布資料

資料1 事務局資料

資料2 「デコ活」～くらしの中のエコろがけ～脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る
国民運動

資料3 サステナブルファッションの推進

資料4 瀬戸内市の取組み紹介

資料5 脱炭素化に資する事業創出の進め方について

6. 議題

1) 本日第2回研究会の概要とテーマについて

研究会の概要と第2回のテーマについて事務局より説明。

2) 「デコ活」～暮らしの中のエコロがけ～脱炭素につながる新しい豊かな暮らしを創る国民運動について

講演後、下記の通り質疑応答を行った。

● 質疑応答

岡山県：デコ活の認知度について、昨年度3月時点で25%とのWebアンケート結果をお話しいただいたが、環境省として目指す認知度の目標はどの程度か。

環境省：理想的には100%を目指しているが、まずは2030年までに一般化することを目標としている。具体的な数値目標は設定していないが、クールビズのように8割以上の認知度を目指す必要があると考えている。

岡山市：認知度向上の目標に関連して、今後環境省が取り組む具体的な施策や、我々地方自治体や民間事業者が認知度向上に向けてできることを知りたい。

環境省：私たちの取組みは普及啓発ではなく社会実装を目指しており、メディアを活用するのは難しい部分がある。補助金採択されたものや、補助金支援のみならず、官民連携で創発するプロジェクトを全国的に展開し、地方部にも力を入れたいと考えている。また、脱炭素先行地域や重点戦略といった点についてもデコ活として整理している。これまでCOOL CHOICEとして進めていた取組みや、それ以外についても国民消費者が何かを変えるというコンセプトの取組みについてはデコ活と捉えて発信していただきたい。

事務局：デコ活に関連する補助事例をご説明いただきましたが、センサー技術やITの発達が進む中、CO2削減効果を可視化する取組みがまだ十分ではないという指摘もある。デコ活に取組まれている中でそのような技術や協力できる事業者があれば知りたい。

環境省：可視化において非常に重要な点は、データの精度と、可視化後にそのデータを価値化することにあると考える。実データを持つ企業や第三者認証機関との連携は進んでおり、そういったところの紹介は可能。課題としては、一部のデータは可視化できているが、一部はデータがないといった整備のしきれていない状態が課題となっている。データが点在していることによる統合の難しさ、特にセキュリティに関するハードルはあるため、経産省とも議論を重ねている。2026年を目処にデータ統合や可視化の確からしさ、また、可視化後のインセンティブとなる価値観を整備しなければならないと考えているが、現段階ではまだ課題が多く、完全な状態には至っていない。

3) サステナブルファッションの推進について

講演後、下記の通り質疑応答を行った。

● 質疑応答

リペア協会：good on youの評価は商品カテゴリではなく、ブランド全体の評価であるという認識でよいか。また、評価は製品製造の時期によって変わってくるのか。

鎌田：評価はブランド単位で行われます。サステナブルな取組みを一部で実験的に行っている企業でも、全体がサステナブルであるように見えてしまうと情報が誤って伝わる可能性がある。そのため評価が低いブランドでも、特定の商品が良い可能性があることもある。

リペア協会：古着やリサイクル品に対する評価はどう適用されるのか。

鎌田：現時点での取組みを評価するため、例えば過去のコレクションがリユース市場に出てきた場合、評価と一致しない可能性がある。リユースやリペアを長く続けることは重要であり、新しく生み出すものについては厳しい目を持つべきであると考えている。

岡山市：岡山市のゴミ減量化・資源化に取り組む部署に所属しており、市民から古着の提供を受けている。また、古着が海外に輸出されるルートも存在するが、その一部が最終的にゴミとして海外で放置されている状況がある。メルカリやゾゾタウンなどの市場では価値のある古着も存在するが、そういった市場で売れなかったものが自治体のリユースに回ってきたり、質の低下やファストファッションの普及も影響していると考えている。このような局面の中で、環境負荷低減の観点から、古着のリサイクルについて自治体が今後どのようなスタンスを取るべきかヒントがあれば知りたい。

鎌田：衣類の回収や再資源化が大きな課題となっていて、今作られている衣服も将来的にはリユース市場やリサイクル市場に入る可能性がある。そのため、環境配慮設計やリサイクルしやすい素材の使用が重要で、これが将来的には廃棄衣類の評価に影響すると考えている。現在、衣類の7割以上が混紡繊維であり、回収されても分離が難しくリサイクル市場が確立されていないため、回収衣類の価値を見出すことが難しい状況にある。経産省や環境省は、分離リサイクル技術の開発や回収システムの強化に取り組んでいるが、価値が生まれるまで数年かかる可能性がある。それでも、回収を止めないことが重要であり、海外への輸出も現状では回収を続ける手段として有効と考えられる。回収を止めず続け、回収のインフラを整えておくことが、今後技術開発されたときに、資源が循環していくために非常に重要である。

河野：good on youの評価方法に関して、時間軸での評価が今後採用されるのか、また現在のブランド評価が5年後に見直される可能性があるのか、評価基準が時代に合わせて変わっていくのかという点について、仕組みを教えてください。

鎌田：評価は定期的に更新されており、ブランドページの一番下に評価の年月が記載されている。例えば、2021年の評価があると古く感じるため、本国の調査チームに最新の調査を依頼することもできるが、再評価は順番待ちの状況である。また、企業がgood measuresという有料サービスに加入すると、改善の報告がすぐに反映され、再評価が迅速に行われる仕組みもある。

岡山市：good on youのスコアに、脱炭素化に関する項目はあるか。

鎌田：もし評価指標に興味があれば、「Shift C」または「good on you」のHP内にスコアリングに関するページがあり、そこに主要な評価項目が記載されている。脱炭素に関する項目というのは非常に多い。衣類のサプライチェーンにおいては各段階での排出量を把握することが評価項目の一つである。具体的には、縫製段階、生地製造・染色段階、原材料段階（石油採掘や農法による違い）等についての排出量を把握し、それを開示しているか、そして、削減目標とその実行計画があるかといった情報開示に関するものが多い。さらに、エネルギー使用に関する項目もあり、再生可能エネルギーの利用状況や電力構成（石炭火力など）、使用する素材（コットン、オーガニックコットン、リサイクルポリエステルなど）に関する項目もある。非常に多くあるが、「把握」「開示」「削減計画」といった点で分かれている。

事務局：環境に配慮した取組みは意識の高い人々には有効で、例えば買い物する際にサイトで表示されると、消費者の意識を向けることが出来ると思う。今回のデコ活の目指しているのは社会実装とのことであるが、社会実装を大多数の人が行動を変える事

であるとする意識が高い人々だけでなく、意識が低い人々の行動変容を促す必要がある。そのためにはどのようなアプローチが有効か具体的なヒントがあればご教示頂きたい。

鎌田：多くの消費者にとって価格は購買意思決定の重要な要素であり、環境負荷が高い方が安価であるという現状を解決しない限り、環境に優しい商品が選ばれにくいと感じる。ただし、一部の消費者は少額の価格差であれば環境配慮型の商品を選ぶことがあるため、情報提供は重要である。また、現場の製造プロセスへの理解が深まれば、消費者の購買行動が変わる可能性があり、現場を知って適正価格の認識を広めることも有効である。特に岡山のような産地では、中学校や高校など、自分の意志でこれから買って行くであろう方々に現場を見てもらうのは効果的だと考える。サステナブルな商品が高いのではなく、それが適正価格であり、一般の商品が安すぎるのではないかという認識が広まる必要があると感じる。実際にこれまでツアー参加者の中にもそのような意見を持つ方もいた。教育や関心がある人への情報発信は、全体を変えるには十分ではないが、非常に重要な取組みである。

4) 瀬戸内市の取組み紹介について

講演後、下記の通り質疑応答を行った。

● 質疑応答

岡山ガス：(瀬戸内 Kirei 太陽光発電所について) 主要電源が太陽光であると、電源の調整が難しいと考えられるが、今後調整を進めていくのか。また、電力の提供についてはこれから進めていくのか。

坪本：太陽光のみで供給と需要のバランスを取るのは非常に大変で、これから進めていく予定である。ベース電源がないため、これが難しさの一因となっているが、今後はこうした課題も考慮していきたいと考えている。

岡山ガス：メガソーラーは FIT 制度を利用しているのか、また出力調整の状況について知りたい。バイオマスの検討が進んでいるとのことだが、熱利用については具体的にどのような用途を想定しているのか。

坪本：FIT で販売している。現時点では出力制御の影響は低いですが、徐々に増えてきている。熱利用に関しては、ハウス栽培における熱利用を考えている。

岡山市：脱炭素先行地域に関する共同提案者が複数いる中で、今回のアイデアの出所や、さまざまな利害関係者との合意形成のプロセスについて知りたい。

坪本：脱炭素先行地域は、共同提案者が必要であり、実施できる確度を上げた提案を行う必要がある。しかし、採択されるかどうか不明な中で確度を上げた状態で提案するのは難しかった。瀬戸内市では、市が「こんなことをやりたい！」と考えていたところ、邑久町漁協が牡蠣いかだを再利用したいと市長室に持ってこられた。これをきっかけに、一緒にできないか話し合いが始まった。他の事業者はプロポーザルで選定し、共同提案者としてまとまっていった経緯である。

岡山市：(資料 13 ページ 脱炭素選考地域づくり事業_概要について) 主なエネルギー需要家としての戸建住宅 912 戸について、どの程度の合意形成ができているのか、また達成の見込みについて知りたい。

坪本：合意形成については住民説明会を複数回実施し、そこで収集したアンケートや行政委員との話し合いを通じた感触をデータとして積み重ね、環境省に提出している。現在、912 世帯に向けた電気メニューを検討中で、そのメニューを発表し協力を得るための営業活動を来年度から本格化させる必要がある。この営業活動の成果によって、達成度が決まると考えている。

事務局：新興住宅地があるのではなく、既存住宅の電気を切り替えるということか。
坪 本：その通りである。

- 5) 脱炭素化に資する事業創出の進め方について
事務局より説明。質疑なし。

以上